

以下は細かい点だが、「Conclusion」とあるが、内容がニントゥアン省に日本が建設を予定していた原発の話などになっている。原発輸出の問題に関わっていた評者は、著者がこの問題を大きく取り上げたことに感謝したが、コラムのような形で取り上げるのも一案だったのではないか。また、[大川 2017]への言及が無かったが、カンボジアとベトナムの同じメコンデルタのチャムの比較も知りたかったことのひとつである。

以上、メコンデルタのムスリムのチャムを含めて、ベトナム全体のチャムを詳細に分析してそのエスニシティを検討した本書は、ベトナム研究者やチャム研究者だけでなく、エスニシティ研究やムスリムネットワークに関心のある方たちにも広く読まれるべき力作といえよう。

引用文献

大川玲子. 2017. 『チャンパ王国とイスラーム—カンボジアにおける離散民のアイデンティティ』平凡社.

関根康正編. 『ストリート人類学—方法と理論の実践的展開』風響社, 2018年, 768p.

北嶋泰周*

本書は編者が著書『〈都市的なもの〉の現在』及び国立民族学博物館の共同研究「ストリートの人類学」で試みてきた議論を、方法と理論の実践的展開として発展させたもの

である。序章において編者はストリート人類学の目的が現代を生きる人々に必要とされる「自己限界を生き抜くという根源的な生のあり方に届くような深みを持った真の遊動性に触れた実践知の提供」(p. 22) であるとする。その背景には民衆がホーム中心的な発想でやり過ごしていた状況が不安定化し、ストリートを生き抜く知恵が必要になったことがある。そこで編者が注目するのはヴァルター・ベンヤミンの「敷居」概念であり、編者自身が「ストリート・エッジ」と言い換えるこの場所に、時間と空間の交差の中で実践行為としての創発が生まれるとする。その創発は他者を排除する自己中心的な「ネオリベ的ストリート化」での往路の想像力ではなく、他者の受容によって起こる自己変容、つまり「自己を他者化」する「根源的ストリート化」での復路の想像力によって生まれる。

本書は序章と結章に加えて、起承転結の20章からなる本論と総括討論からなる。以下では各章を概観していく。

〈起〉メジャー・ストリートの暴力と排除に抗して—棄民される人々の中へ

1章においてトム・ギルは、東北地方における原発事故被災者を事例に、支配的な「ふるさと主義」のイデオロギーとそれに対抗するストリートウィズダムの葛藤を報告する。その背景には、放射能汚染による不浄差別と多額の賠償金による妬みの差別という二重のローカリティの意識が存在しながらも新天地に溶け込もうとする人々の姿があった。2章において飯嶋秀治は、児童養護施設内の暴力

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

を事例に、ネオリベ的ストリート化を補完する専門職のみの制度で構成される効率的なルーティーンの遂行とは対照的に、個々の子どもたちの顔に対する自らの存在の関わりに気づくことに「根源的ストリート化」の兆しを見出していく。3章において田嶋誠一は、同じく児童養護施設等における暴力を事例に、社会の急激な変動によって絶対的な価値が疑われる中で誰しものが共通した価値として共有できるものを明らかにする。それは全ての子どもたちにとっての最優先事項は成長基盤となる安心・安全であり、それは大人たち自身の安心・安全の保証にも連関するものであった。4章において根本達は、インドにおける反差別運動に取り組む日本人仏教僧の実践を事例に、時に応じて神の力を肯定ないし否定することで、アンベードカルとは異なる「元不可触民の指導者／聖者」となり、自らの脱領土化による狭義の当事者性を獲得していく様を描く。

〈承〉ストリートの表層と内奥の往還―新しい敷居の発見から自覚へ

5章において近森高明は、ゾンビ化するストリート（ストリート性抜きストリート）の存在論が人間的事象を支えるマテリアルな次元であり、ゾンビ的存在として例外状態に置かれた剥き出しの生こそが敷居を生み出す契機となると言及する。6章において南博文は、ニューヨークと広島「道」を事例に、遊歩体験が路面のでこぼこや路傍の石といったアクターの参加と「道」に埋もれた記憶の発掘を生み、それがストリートの開放的契機を取り戻すための「足がかり」になるとす

る。7章においてモニカ・ザルツブルンは、パリのサント・マルト地域と東京の都市菜園を事例に、ローカルな社会的ムーブメントによる私的空間から公共空間への変容と象徴的かつ物理的に公共空間を共有することに言及し、「行政公認の計画と住民の創案による占有との間の境界域」（p. 171）に敷居を見出していく。8章において鈴木晋介は、新潟県長岡市の震災と「かぐらなんばん」を事例に、野菜と人によって紡がれ続ける「生きたローカリティ」の様相を提示する。そこには在来作物に連鎖する非匿名的な人のつながり、「種をつないでいく」という営為そのものの、伝統野菜ムーブメントがもつローカリティの賦活作用が存在したと言及される。9章において姜竣は、徳島県における漂泊芸能民を事例に、庶民による生活に根ざす関係が美的価値を生み出すさまを明らかにした。そこでは近世社会で周縁化された身分に置かれた彼らが、祭礼での警固権を自らの漂泊性とネットワークを活かして興行権へと変え、興行と儀礼という意味が多義化した人形芝居が国家や市場から自由な芸能のオルタナティブな場を形成していた。10章において中野歩美は、タール砂漠地域における定住化する放浪民の呪術的实践を事例に、ネガティブなイメージを再帰的に内面化するジョーギーたちへ向けられるアドホックな語りから、彼らの〈賤〉かつ〈聖〉という両義的な「異人性」を生み出し、それこそが彼らの生きる場を創出させていると述べる。11章において朝日由実子は、カンボジアにおける市場経済化と絹織物業を事例に、新たな社会関係を創発す

る契機としての分業化をみる。そこには高級絹緞織物「ホール」が織り手の分身としての在り方だけではなく、気を遣う近隣者とは異なった、良い距離感をもつ「他者」との純粋な経済利益を生む商品としての在り方という両義性が存在した。12章において森田良成は、東ティモール国境における密輸を事例に、村人が「国家への忠誠」を表明しつつ国家の承認を受けて活動を続け、問題が発生した際には自らの周辺性を適当に維持し、密輸という生活手段を続けるという日常を保って生き抜くさまを報告する。

〈転〉マイナー・ストリートの創造力—ヘテロトピア・デザインに向かう実践

13章において関根康正は、インドにおいて関根自身が敷居を発見した体験を踏まえ、排除されてきた貧困者たちによる歩道寺院の設立を事例に、さまざまな環境の偶然を文脈にして他者を取り込む創発の連鎖によって生活空間を自前で構築していくさまを明らかにする。14章において和崎春日は、ベトナムにおける民衆ストリートが人々全体を結びつけながら社会を生成していくという、ストリートがもつ文化の創発性と自揚性の源泉力を報告する。ハノイのタヒエン通りは逸脱やハズレ現象を当たり前として日常範疇に入れ込んでいくことで周辺化した人々をも受容していく。15章において小馬徹は、ケニアのストリート言語がもつ他言語やその方言を取り込みながら言語間の差異を融解していく歴史を報告する。その歴史的過程から、蔑視されてきたシェン語が多民族的国家における国民統合の可能性を内包していると推察する。

16章において岸上伸啓は、カナダにおけるイスイットの新たな生き方の創発を報告する。極北地域においてはネオリベとは真逆の性質をもつ生業捕鯨の復活、南部地域においては多様なアクターとの協働やグローバル化した通信媒体を用いてイスイット・アイデンティティを維持しているさまを明らかにする。17章において村松彰子は、東日本大震災期の気仙沼市における公共システムから外れた避難所での生活再建を報告する。琴平神社の宮司である清原正臣氏によって書かれた日誌から、受動的に救援を受ける被災者とは異なり、岩井崎の住民たちは相互扶助による創発のために過去の関係を通じた自治・協働を生み出していたと言及する。続いて18章において小田亮は、同じく震災後の避難所から「災害ユートピア」という相互扶助について考察する。それはどこにでもみられる真正な社会に異なる関係が積み重ねられていくという創発性を持ち、他者を受容して多層の共同体を作り上げていくという実践に「根源的ストリート化」を見出していく。

〈結〉ストリート人類学的要諦—「ネオリベ・ストリート化」から「根源的ストリート化」へ

19章において西垣有は、『都市的なものの現在』を起点としたストリート人類学が折り返し地点を通過することで「ストリートへ」から「ストリートから」という問いの拡張と生成変化の過程を辿る。20章において関根康正は、ロンドンのサナータン寺院建設からヘテロトピア・デザインの実践を考察する。純粋不二元論に発するサナータンの理

解によって「クリシュナの場」が生まれ、「有」なる自己の放棄を通じた「無」あるいは「空」という受動的能動性が自立的な自己変容のダイナミズムを作り出せるという。続く結章において関根は、ストリート人類学の挑戦が「無1→有→無2」という往路から復路への折り返しという時間性を空間論的転回に組み込んだ「ストリート論的転回」以降の人類学実践であると表現する。そして「ネオリベ的ストリート化」を他者との対話を絶った内閉空間化だと喝破し、「根源的ストリート化」を組み込んだ創発的な生き様が、人間の本来の生き様である」(p. 661)と論ずる。総括討論では、まず西垣有は、多岐にわたる各章の議論から近傍や生成変化というひとつの先端からストリート人類学の特徴を挙げる。次に野村雅一は、大道芸人の目線から見たストリートの人類学から、ストリートの人類学を考えるうえでホテル化に抵抗する課題が示唆的であるという。阿部年晴は、近代社会においてストリート化する基礎社会＝後背地が近代文明とは異なる次元の創造性を持ち、その世界観と方法の表象としての神話は世界生成を語る究極の構想力であると述べる。

以上が本書の概要であるが、評者による若干のコメントを付したい。本書の魅力は大きく2つある。第一に、編者らが「ストリート」の概念を広義に捉え、極めて多様な地域や研究対象をもって論じられている点である。ここでいう広義の「ストリート」とは、社会の底辺に「排除された」感覚をもつ限界状況に陥る中で自己の力にこだわる自分を放

棄し、他者の力を受け取る協働を実践する人々を指す。それは編者自身が最初に着想を得た「顕在的で狭義ストリート・エッジ現象を提供し…ストリート人類学の初学者にとっては格好の研究対象」(p. 18)である歩道寺院のような「路上」という場を意味する狭義のストリートとは射程の広さが異なる。したがって本書は多彩な事例から、ホーム中心の発想をもつ「われわれ」にとって遠い存在であったはずの「ストリート」がいかに〈地続き〉の世界にあるのかを明らかにするものとなっている。第二に、この「ストリート」という概念を軸とした厚い記述によって、編者による人類学の核となる問いに対する応答が試みられている点である。これまでの編者によるインドのハリジャン研究から本書のストリート研究へと展開していく過程で一貫されていたのは、「境界外部的視点」から「境界内部的視点」への移行および徹底された「下からの視点」による脱中心化〔関根 1995〕であった。この編者の姿勢は、本書における多様な論者による議論の展開をもって「人間が人間として生きるとは何か」(p. 26)という人類学における根源的な問いに対する「自己を他者化する」という応答を導き出すものとなっている。

次に評者が少し気になった点を挙げる。それは本書における広義の「ストリート」という概念が狭義のストリートの現場や、類似したスクウォッター研究の現場にどれほど還元できるのかという点である。具体例として挙げると、編者がストリート人類学の着想を得たとされる13章において、歩道寺院に生き

る人々がどこまで生物学的だけではなく社会的に生きる世界を自前で構築できているのかという点においては記述が不十分であるように思われる。スクウォッター研究の観点からいえば、これまでの生物学的に生きるための不法占拠が明らかにされてきた事例[e.g. チャタジー 2015; 上田 2010]とあまり相違がない。確かに歩道寺院の一般的な信仰の記述から宗教的側面がみられるものの、彼らが社会的に生きる世界を自前で構築していく実態としての不法占拠[e.g. 北嶋 2022]については十分に記述されていないと指摘できるだろう。これほど多様な事例に基づいて展開された広義の「ストリート」であるからこそ、編者が着想を得ることができた狭義のストリートあるいはスクウォッター研究などへと再び還元されることを期待したい。

以上、評者の感じた細かな点を挙げたが、本書は編者による極めて根源的かつ示唆的な人類学理論の展開に加えて、各論者による多彩な事例とアジア・アフリカ地域の枠を越えた壮大な地域横断研究としても位置づけられるものである。研究対象や地域を問わず人類学や地域研究を学ぶ全ての人の手に渡ってほしい一冊である。

引用文献

- 上田 達. 2010. 「居座る集落、腰掛ける人々—マレーシアの都市集落の事例より」『文化人類学』75(2): 216–237.
- 北嶋泰周. 2022. 「フィールドワーク便り かけがえない居場所—サードプレイスとしての闇市」『アジア・アフリカ地域研究』21(2): 308–313.
- 関根康正. 1995. 『ケガレの人類学—南インド・

ハリジャンの生活世界』東京大学出版会.

チャタジー, パルタ. 2015. 『統治される人びとのデモクラシー—サバルタンによる民衆政治についての省察』田辺明生・新部亨子訳, 世界思想社.

小林和夫. 『奴隷貿易をこえて—西アフリカ・インド綿布・世界経済』名古屋大学出版会, 2021年, 326p.

中尾世治*

本書は、18世紀から19世紀半ばまでの西アフリカで取引されたインド綿布を中心に、西アフリカの消費者、南アジアの生産者（織工）、イギリスとフランスの仲介者（商人）という3者の連関の形成を描いている。18世紀から19世紀半ばは、イギリスで産業革命が生じた一方、西アフリカ内陸では大規模なジハード運動（イスラーム国家建設運動）が生じ、沿岸部では大西洋奴隷貿易から「合法的」貿易（奴隷以外の換金作物貿易）への転換が生じた時代であった。この時代の経済史は、かつての従属論や世界システム論では、世界経済の「中心」と「周辺」の形成として論じられてきた。しかし、そのような議論は、『犠牲者』としてのアフリカ像の提示に終始し、「アフリカ大陸に住む人々のエージェンシー（行為主体性）」を軽視してきた（pp. 10–13）。そこで、本書では、グローバル・ヒストリー研究を踏まえて、グローバルな局面での相互依存関係の成立と統合として、西アフリカと南アジアの連関を、

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科